

令和4年度学内版 GP 成果報告書

取組名称	復習の支援による大学での学問習得の促進	
実施組織	理学部理学科 物理学コース , 理学部理学科 化学コース	
※連携する他学部・機関がある場合は記入		
取組責任者(所属)	志水 久 (理学部) , 巽 広輔 (理学部)	
取組の目標	物理学および化学の理解の促進	
<p>1. 目標達成のために行った活動と、その成果</p> <p>※活動, 成果ごとに番号を付けて箇条書きで記載する。 ※成果の詳細は必要に応じて別添 としてもよい。</p>	<p>1. 物理学コースでは次の(1)～(4)の授業にチュードントアシスタントを配し、宿題の支援および宿題・試験の復習の支援を、授業時間外に行った。また、(1)～(4)の各授業では支援の利用を成績に取り入れた。各授業の支援の利用状況は以下のとおりである。</p> <p>(1) 「力学Ⅲ演習」 支援利用回数：15回</p> <p>(2) 「電磁気学Ⅰ演習」 支援利用回数：68回</p> <p>(3) 「熱力学演習」 支援利用回数：7回</p> <p>(4) 「量子力学Ⅰ演習」 支援利用回数：0回</p> <p>これにより、上記の授業で単位の取得率(受講者数に占める単位取得者数の割合)が、前年度と比べて7%～10%向上した。</p> <p>2. 化学コースでは、「分析化学Ⅰ・Ⅱ」, 「無機化学Ⅰ・Ⅱ」, 「有機化学Ⅰ・Ⅱ」, 「物理化学Ⅰ・Ⅱ」にチュードントアシスタントを配し、宿題の支援を中心とする学修支援を授業時間外に行った(支援利用者数：計23回)。また無機化学Ⅰについては、中間テストの1週間前にもチュードントアシスタントによる学修支援を実施した(支援利用者数：計38回)。上記授業の単位取得率は、前年度と比較して数%の微増または微減であり、これらの取組による顕著な効果は見られなかった。</p>	
<p>2. 目標達成度に関わる自己評価, 理由, 今後の展望</p> <p>※a-e から該当するものを選び、その理由と今後の展望を記述</p>	<p>【自己評価】 「取組の目標を達成できた。」について</p> <p>b: そう思う。(取組1) c: どちらともいえない。(取組2)</p>	<p>(自己評価の理由)</p> <p>取組1により、上記の全ての授業で単位取得者数の割合が増加したことは、この取組が学生の物理学の理解を促進させたと考えられる。一方で、4つある授業のうち1つについて、支援の利用者がいなかったにもかかわらず単位取得者数の割合が増加したことに関しては検証が必要と思われる。</p> <p>また取組2については、単位取得率に向上が認められなかったことから、cと判断した。</p> <p>(今後の展望)</p> <p>授業を履修する学生は毎年異なるため、同じ取組が同様の効果をもたらす保証はないが、成績分布などの学生の理解度の指標を基に、アレンジを加えながら同様の取り組みを継続していくことで、更なる理解促進を図る。</p> <p>全体的に、成績の悪い、すなわち支援が必要と思われる学生ほど支援を利用しない傾向があり、今後はそのような学生を学修支援の場にどう連れ出すか、という点を工夫していきたい。</p>